令和５年度

総合型選抜Ⅰ期

保育学科

課題作文

試験開始までに下記の注意事項をよく読んでください。

試験時の注意事項

① 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
② 開始の合図の後、解答用紙に「**氏名**」・「**受験番号**」を記入すること。受験番号は算用数字で記入すること。
③ 解答用紙は横書きで記入すること。
④ 記述解答で、字数の指定がある問題では、句読点やカギ括弧（かっこ）は１字として数えること。
⑤ 下書きは、問題用紙の余白または裏面を使用すること。
⑥ 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
⑦ 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

学びが起こるきっかけとなる「問い」に寄り添う

学びが起こるきっかけは、問いです。

「あれ？　どうしてだろう？」「なんでそうなるの？」と子どもが問いを持ったとき、そばにいる大人が、「面倒だな。そんなこと気にしなくていいんだよ」と思って問いを持つことを否定してしまうか、「すごいところに気がついたね。本当に不思議だね」と思って寄り添うかで、子どもたちの興味や関心は変わっていきます。

ある女の子が、一年生の算数の授業で面白い質問をしたことがありました。問題は次のようなものでした。

「A ちゃんは飴玉を 5 個持っていました。そこにお母さんが何個か飴玉をくれたので、いま、13 個ありますってね。お母さんは何個くれたのでしょうか」

正解は、「13－5＝8」。答えは 8 個です。

「くれた」という足し算を、式を立てるときに引き算にして考えなければならない問題です。

でも「先生、この問題、おかしい」と、ある女の子は言いました。

「お母さんが飴玉を 8 個なんてくれるわけないもん。うちは 1 個しかくれないよ」

この子の場合には、まずこの問題の設定自体に疑問を抱いています。このように、その子の世界で起こることとのズレは、教科に対する興味に大きく影響します。

その子が素直に抱いた問いに対して、「これは算数の世界だから、これでいいの」と言われてしまったとしたら、その子は、「学問の世界は、現実にはありえない世界のことを考えること」と捉え、そこで魅力を感じなくなるかもしれません。

自分に全く関係のないことを数字だけで教えられ、自分なりの疑問や考えを止められると、きっと興味がなくなってしまうでしょう。それよりも、子どもたちの実際の生活の中にある算数を探したほうが、子どもたちはより興味を持つことができるはずです。

子どもに主体的に学んでほしいと思うなら、算数や数学を、現実の生活の中に見つけていくことが必要です。

日常の世界の中で、子どもたちはさまざまなことに疑問を持っています。

「なんでアリさんは一列に歩くんだろう」

「なんでお空は青いんだろう」

子どもたちの疑問に対して、「大人には思いつかない疑問だな」「すごいなあ」と私たち大人が思えるかどうか。ここが教育のスタート地点になるのです。

「子ども主体の保育」や「子ども主体の教育」ということがよく言われるのですが、私は、子どもだけが主体になったとしても、いい教育にはならないと考えています。

子どもたち一人ひとりが抱いた疑問を出し合って、共有し、みんなで話し合う。その中で、みんなが一番興味を持ったことについて、一緒に考え、調べる。

そのとき、疑問を持った子どもたちに先生も感動しながら、「そういえば、改めて考えたらなぜだろう。不思議だな」と疑問を持ち、一緒に考え、調べ、学んでいく。先生自身が、疑問を持った子どもたちをサポートする面白さを感じているかどうかで、子どもたちが本当に納得できるところまでたどり着くかどうかが変わります。その姿勢こそ教師や保育者の主体性です。

つまり、子どもに対する理解も含め、先生の中にも貪欲に学ぶ姿勢が必要なのです。子どもたちの主体性と、先生の主体性が複雑に絡まり合って、学びは促進していきます。

親の場合も全く同じです。子どもを育てたい、よい教育をしたいと思うなら、子どもの抱く疑問や子どもの考えに興味を持ち、面白がりながら、自分自身も改めて問いを立てて考えたり調べたりすることです。子どもはその姿を見て、親の世代を乗り越えていくのだと思います。

（出典：汐見稔幸（2021）教えから学びへ―教育にとって一番大切なこと．河出書房新社.）

設問　著者が伝えようとしていることをまとめたうえで、その内容に基づいて保育を行う場合、どのように子どもと関わりたいと考えるか。できるだけ具体的に述べなさい。（600 字以内）